2019年度 東北学院大学入学式挙行

2810名の新入生を迎える

四月三日、「二〇一九年度東北学院大学入学式」がカメイアリーナ仙台において挙行された。

定刻の十時半から始まった式典では、讃美歌、聖書朗読、祈祷が執り行われた後、大西晴樹学長が入学を宣言。大学院・学部を合わせた二千八百十名の新入生を迎え入れた。

大西学長は本学の歴史、スクールモットー、TG Grand Vision 150などについて話し、最後に「皆さんは今日から新しく自分の専門に即した四年間の学びがスタートしました。四年間で何を学び、自分の未来、地域の未来、世界の未来にどう結びつけ、将来を切り拓いていくのか。大学はそのためのサポートを惜しみません」と告辞を述べた。

続いて新入生総代として登壇した教養学部人間科学科の髙橋茉柚さんは、「百三十三年という歴史と伝統のある東北学院大学に入学できることに喜びと誇りを感じるとともに、新たな未来への一歩を踏み出すことに身の引き締まる思いを感じています。東北学院大学での学びを通して、自ら新たな事柄に積極的に挑戦しながら、広い視野と高い教養を獲得するとともに、社会で通用するような知恵を身につけ、見識を深めたいと考えております」と宣誓し、大西学長より聖書と讃美歌が贈呈された。

入学式終了後は後援会入会式に続いて、SWE（シンフォニック・ウィンド・アンサンブル）、応援団、チアリーディングチーム（トレフレッチェ）がステージに登場して新入生にエールを送り、最後に全学ガイダンスが行われ、新入生は本学での大学生活をスタートさせた。

中高 2019年度 中高入学式を挙行

四月八日、中学校・高等学校礼拝堂において入学式を挙行した。中高合わせて四百七十二名がこのよき日を迎えることができた。松本宣郎院長は式辞で「皆さんを神様からお預かりした大切な宝物としてしっかりと受け止め、健やかな成長を見守ります。「地の塩・世の光」、LIFE・LIGHT・LOVEの「3L精神」「この二つのフレーズに支えられて、明るく自信を持ち、希望に満ちた学校生活を始めてください」と述べ、阿部恒幸校長は「世の中は出身校を評価する時代から、その人に何ができるかを評価する時代に確実にシフトしていきます。心身ともにタフであること、誰とでもコミュニケーションがとれることも世の中では高く評価されます。体も心もバランスよく成長させてほしいです」と告辞を述べた。【写真①】

榴ケ岡 榴ケ岡高校入学式

四月九日十時から、榴ケ岡高校礼拝堂にて入学式が挙行された。多くの保護者が参加し、厳粛な雰囲気の中、前奏、讃美歌、聖書朗読、祈祷に続き、湯本良次校長による入学宣言をもって二百七十四名の入学が許可された。

続いて、松本宣郎院長から式辞が、湯本校長から告辞がそれぞれ述べられた。その後、新入生の担任紹介に続いて、野川岳さんによる新入生宣誓が行われ、代表の熊野咲樹さんに聖書と讃美歌が贈呈された。

最後に全員で校歌を斉唱し、頌栄、祝祷、後奏の後、吹奏楽部の演奏の中、新入生は担任教諭に先導されて各教室へと向かった。【写真②】

幼稚園 2019年度入園式

桜もほころび始めた四月十日、幼稚園ホールにて第五十八回入園式が挙行され、新入児四十六名が東北学院幼稚園の仲間入りをした。

ピンクと薄緑の新しいスモックに身を包み、保護者に手を引かれながら登園する園児たちは、これからの生活に期待を膨らませているかのような可愛らしい笑顔を浮かべていた。式は卒園式と打って変わり、泣き声も入り交じった賑やかな中行われたが、「お祈りをします」と言われると、小さな手を合わせ、目を閉じてお祈りする姿が見られた。そして、一人ひとり名前を呼ばれると元気に返事をし、新たな幼稚園生活をスタートさせた。【写真③】

2019年度 春季特別伝道礼拝

注がれるまなざしの下で

5月8日から9日の2日間、2019年度の春季特別伝道礼拝が各キャンパスで行われた。8日には多賀城キャンパスにおいて、宇都宮教会の木村太郎牧師により「注がれるまなざしの下で」という題で説教がなされた。木村牧師は「詩編」139編13～18節、「ヨハネの手紙一」4章9～10節を取り上げ、神様が私たちに注いでくださるまなざしについて語られた。神様はいつも自分を見ている、と書いてある。それは恐ろしいことでもあるが、この聖句は、神様のまなざしが、自分が生まれる前からずっと注がれていたことに喜び、感謝している。神様のまなざしは、神様と私たちを繋ぐ命綱でもある。その命綱によって自由自在に、恐れなく生きることができる。自らに注がれている神様のまなざしがあることを確信し、その下で自分は生かされていると信じるとき、私たちは本当に自由になることができる。

木村太郎牧師

8日には泉キャンパス、9日には土樋キャンパスで、青山教会の増田将平牧師により「見ないのに信じる幸い」という題で説教がなされた。増田牧師は「ヨハネによる福音書」20章24～31節を取り上げ、キリストの12弟子の一人トマスについて語られた。トマスはキリストの復活を信じることができず、キリストの手とわき腹の釘の跡に手を入れてみなければ信じない、と言った。そんなトマスの前に復活したイエスが立ち、自らの傷を進んで示された。トマスは、キリストの十字架の死が、自分の罪を赦すために注がれるキリストの愛であることがわかり、キリストの復活を信じた。自分の目と手で確かめたことだけではなく、復活した主イエスの愛を信じることが何よりも確かである。見ないで信じる人は幸いである。

増田将平牧師

見ないのに信じる幸い

このように、お二人の先生方によって、目には見えなくても、確かに私たちと共にあり、私たちを導いてくれる神の愛が語られた。私たちもそれを信頼し、日々を歩んでいきたい。

＜大学宗教主任　阿久戸　義愛＞

E・S・S・サークル Helen's Story 感動の上演会

東北大学、東北学院大学、宮城学院女子大学の三大学E・S・S・サークルによるヘレン・ケラーの英語劇「Helen's Story」が、三月二十九日午後二時から仙台市福祉プラザ二階ふれあいホールで開催された。

物語は誰でも一度は聞いたことのあるヘレン・ケラーのお話。英語劇というと敷居の高いイメージだが、E・S・Sの英語劇には字幕スーパーが映し出され、小学生が見ても十分内容が伝わるように構成されていた。

幼い時、ある日突然病に侵され、視力・聴力を失い三重苦を背負うことになったヘレン。その後七歳の時にサリバンという教師と出会い、運命が切り開かれるという、一時間四十分の映画を観るような舞台だった。

幼少期のヘレンを演じた羽山菫さんとサリバン先生役の黒井駿さんの熱演には客席からすすり泣きも聞こえた。エポックとなった出来事を丹念に演じた後、舞台には成人したヘレン・ケラー役の小椋汐里さんが登場しメッセージをスピーチした。

三大学のE・S・S関係者全員がひとつになって創り上げた英語劇「Helen's Story」は、一時間四十分を一気に演じ切る感動の英語劇だった。この上演を機会にE・S・Sのサークル活動が活況となることを願わずにはいられない。

高橋秀悦経済学部教授 日本地域学会会長に就任

十二月十六日に開催された二〇一九―二〇二〇期の新理事会で、本学経済学部の高橋秀悦教授が日本地域学会の会長に推挙され、会長に就任した。

日本地域学会は、地域に関する総合的で学際的な学術研究の進展をはかり、地域科学の進歩発展に貢献することを目的に一九六二年に設立され、現在では千名を超える会員を擁している。

高橋秀悦教授

同学会の学術的領域は、経済産業系、社会文化系、生命環境系、情報科学系、交通工学系、都市工学系、農林水産系と幅広く、高橋会長は「政策対応を視野に入れた研究の推進が求められているので、より一層魅力的な研究活動の場を提供していきたい」と話している。